

〈論説〉

一茶と良寛 - 『焚くほどは……』の句を通して -
《補遺編：一茶とはつ雪》

後藤泰一*

はじめに——『七番日記』と“はつ雪”の謎

1. 本考察に至るまでの経緯を述べておこう。以前、民法の視点から、一茶と弟専六の遺産相続問題を考察した折¹、一茶の句「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」に遭遇し驚いた。良寛の有名な句「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」（新潟県燕市国上山にある五合庵の句碑²）を想起したからである。なぜこれほどまでに似ているのか未だにはっきりしないらしく、まさに謎である。ならば、私も（門外漢であるが）この謎解きをやってみようと考えた。ただ、一つ問題があった。一茶の句は『七番日記』³にあるが（『七番日記』は明治43年3月に一茶同好会より刊行⁴）、良寛の句の典拠（原典）が定かでないことである。様々考えた末、典拠の確かな一茶の「焚くほどは……」の句が“いつどこで詠まれたか”を探ることにした。それが「一茶と良寛 - 『焚くほどは……』の句を通して -」⁵である（これを本編という——本編では良寛にも多少言及した⁶）。

『七番日記』の文化12年10月（西暦1815年11月）下段に82句載っているが、その中の晩秋から初冬の句に挟まれて「焚くほどは……」がある（順番に「かさ守りのおせん出て見よ玉叢」「手の皺〔の〕おち葉かくには相応ぞ」「やよ烏赤いおち〔葉〕を踏むまいぞ」「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」「風のおち葉ちよいちよい猫〔が〕押さへけり」「うつ（字津）の山風呑んで向ひけり」「土団（団）子けうも木がらし木がらしぞ」「猫の子がちよいと押へるおち葉哉」と並ぶ。「かさ守りのおせん」とは、笠森おせん（江戸谷中の笠森稲荷前で水茶屋を営む「鍵屋」の看板娘）のことであり、「土団子」は、「笠森稲荷の茶店で売った団子。願をかける時は土の団子、願が叶うと米の団子を供えた」⁷とされている。当時の笠森稲荷は、一茶

* 信州大学名誉教授。現在、信州大学経法学部（大学院）特任教授。専門は民法。

1 「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続 - 河合曾良と小林一茶の場合 -」（以下、副題を省略）『信州大学法学論集』27号（2016年）所収（現信州大学経法学部教授宗村和広氏（家族法）との共著）。

2 新潟県燕市国上寺五合庵の良寛句碑案内板に「堂久保登盤 閑勢閑毛天久留 於知者可難 良寛書 この句碑は良寛全集の著者玉木礼吉氏が全集刊行を記念して玉木氏所蔵のものを展大して建碑」（建碑：大正9年4月）とある（文政2年（1819年）。城下の寺に迎えたいと五合庵を訪ねた長岡藩9代藩主牧野忠精に良寛はこの句を差し出し、これを見て忠精は労りの言葉をかけ国上山を下ったという逸話がある（一茶が詠んだ4年後のこと——本編38頁以下参照）。

3 丸山一彦校注『一茶七番日記（下）』（2003年・岩波文庫）471頁（以下、丸山『七番日記（下）』と略称）。

4 小林計一郎『一茶 - その生涯と文学』（2003年・毎日新聞社）151頁。

5 『専修総合科学研究』第29号（2021年）27頁～43頁。

6 詳しくは、本編38頁以下、とくに43頁を参照。

7 丸山・前掲『七番日記（下）』175頁の注⑧。一茶の頃の笠森稲荷の場所につき、本編34頁～35頁参照。なお、『七番日記』の文化8年10月に「むらおち葉かさ森おせんいつちりし」の句がある（丸山一彦校注『一茶七番日記（上）』（2005年・岩波文庫）202頁参照——以下、丸山『七番日記（上）』と略称する）。

が江戸に入ると定宿の如く滞在する長久山本行寺⁸（日暮里駅北口正面に位置する：当時の住職は一瓢）と日本橋久松町の松井（「久松町の商人。今日庵元夢門。一茶の親友。其翠楼と号した。」⁹）の間にあった（本行寺から550m前後・徒歩7～8分の所）。上記8句は、笠森稲荷境内で詠んだものと考えて間違いない（本編36頁～37頁）。

では、作句日はいつか。『七番日記』は、「上段に年月日・晴雨・行動・見聞した事実等を記載し、下段にその月々の作句（発句・俳諧歌）を録し」¹⁰とされているので、上記の8句が文化12年10月（今日でいうと11月）の“何日”頃に詠まれたのか分かるかも知れない。そこで文化12年10月の天気を見て、霰が降りそうな木枯らしが吹きそうな落葉焚ができそうな日（大晴や雨でなく晴または曇の日）を絞り込むと、“10月13日の日暮れ前”が浮上してきたのである（時季的にも違和感がない）。うまい具合に、この日、一茶は、松井（日本橋久松町）から本行寺へと移動している。

かくして、一茶が「焚くほどは……」と詠んだのは、「文化12年10月13日、日暮前（3時半～4時過ぎ頃）、松井家から本行寺へ移動途中の笠森稲荷境内（旧天王寺（感応寺）境内）」と考えた。一茶は、笠森稲荷で目に飛び込んだ一瞬の光景を鮮やかに「焚くほどは風がくれたるおちば哉」と詠み、他方、良寛は、杖一本の乞食（こつじき）の人生をありのまま「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」と詠んだ（本編43頁参照——本編41頁5行目「形見とて……」の第四句を「夏ほととぎす」と訂正する）。二つの句にはそれぞれ独自性が窺われることから、“一茶は一茶、良寛は良寛”との思いを強めたのである。

2. その後、本編37頁の下から3行目「(ア) 10月は全82句、その37～44番目（全体のほぼ中央）が笠森稲荷の8つの句である」の説明が十分でないことに気付いた。本考察にも少なからず係わるので、ここで修正しておきたい（下記【 】内）。

【「(ア)『七番日記』文化12年10月の下段に82句あり、その37～44番目が笠森稲荷の8つの句である。なお、「文化12年10月部」の作句が他所へ挿入追記されている（文化12年9月に43句、さらに文化9年10月にも39句挿入追記されている）が、本考察はそこまで及んでいない。笠森稲荷関連の8つの句が10月の何日に詠まれたのか、“8つの句”と“日付”との相関関係（対応関係ないし距離感）が分かればそれで十分——離れているより近い方が有利——と単純に思ったからである。】

本編では、文化12年10月下段82句中の「焚くほどは……」の句と上段日付との相関関係・対応関係を探っていた関係上、10月以外に挿入追記された句への関心が薄かった。とはいえ、『七番日記』は、「現存する一茶の日記・句帖類の中で、量的にも最大であり、内容においても、いわゆる一茶調の最盛期を代表する充実する作品群を収め」¹¹た古典であり、そこにもっと意を尽くすべきであった。

3. そう思いつつ『七番日記』文化12年10月の挿入追記例に目を凝らしているうち、“はつ雪”の

⁸ 小林・前掲『一茶—その生涯と文学』115頁参照。一茶は「谷中本行寺」とも書いている——例えば、文化11年（1814年）8月9日、同12年9月8日、文化13年10月1日など。文化8年3月13日には「日暮里」の記述がある。荒川区役所によれば、本行寺は「太田道灌の孫の太田資高が大永6年（1526）に江戸城内平河口に建立し、江戸時代に神田、谷中を経て、宝永6年（1709）に現在の地に移転したという（荒川区公式サイトで本行寺を検索——本編29頁の注14参照）。本稿では、日記から直接引用する以外は本行寺の所在地を日暮里と表示する。

⁹ 丸山・前掲『七番日記（上）』25頁の注①。

¹⁰ 丸山・前掲『七番日記（下）』471頁（『七番日記』解題）。

¹¹ 丸山・前掲『七番日記（下）』467頁（『七番日記』解題）の冒頭部分。

作句経緯（いつどこで詠んだか）について無性に知りたくなかった。本考察の目的は、その“はつ雪（ないし雪）”を巡る謎解きにあるとあってよい（これが「補遺編：一茶とはつ雪」と副題を付けた理由である。なお、この先、丸山・前掲『七番日記』（上）（下）を手元に置くと便利である）。日記の上段にその日の天気や移動先（宿泊地）が書かれているので、その冬初めての降雪日（一茶にとっての初雪の日とその場所）が分かる。下段には“はつ雪”の句が数多く載っているの、上段と照合すれば“はつ雪”の作句日や場所が特定できるかも知れない。本考察は、日記の記録を合理的に繋いでいく作業が基本となるが、それが（法学という学問の）判例研究における事実関係の確認・整理作業に似ている。さて、一民法学徒の目に『七番日記』はどう映るだろうか。

一 『七番日記』に見る降雪日と“はつ雪”との関係

1. 「文化12〔年〕10月部」の挿入追記と“はつ雪”“雪”の句の謎

(1) 『七番日記』の記載形式（上段・下段）につき、丸山一彦氏の解説を見ておこう（本考察は、丸山一彦校注『一茶 七番日記』（上）（下）「本文庫版」（岩波文庫）に依拠しているからである）。

「上段に年月日・晴雨・行動・見聞した事実等を記載し、下段にその月々の作句（発句・俳諧歌）を録し、また時には先人・知人の歌句を交えている。……文化8年以降はほぼ二段分載形式に整備され……その記事・作句は、既存の手帖類から整理して記載したものとと思われるが、しかもなお、同一句・類似句の重出もかなり多く、また未完成の試作句も散見されるなど、完全に整備された句録とはなっていない。……注意すべき点は、『七番日記』の記載順序には前後不整な部分があり、異年次の作句を諸所に挿入していることである。おそらくこれは紙幅の都合で、余白のある所を利用して、異年次の作句の一部を挿入追記したと思われるが、これらの挿入部は十数箇所及んでいる。本文庫版において、あえて手を加えず、すべて原本のままとしたのは、整序の難しさがかえって混乱を生ずることを恐れたからである。」¹²

たしかに、「此次文化〇年〇月二入」と付して他所へ挿入追記しているケースが少なくなく、そのいくつかはかなり複雑な様相を呈している。

(2) 「かさ守りのおせん出て見よ玉霰」「焚くほどは風がくれたるおち葉かな」等“笠森稻荷”関連の8句が載る文化12年10月の作句を見ると、次のように3か所に分散している。(i) 82句が10月に記入され、(ii) 43句が前月9月の余白に挿入追記され（「文化12年10月部」）、(iii) 39句が文化9年10月の余白に挿入追記され（「文化12年10月部」）、これらの合計が164句となっている。

(3) ところで、文化12年10月の下段（上記(i)）に「繩帯の美人辻（にが）すなけきの雪」の句がある。ただ、10月の天気「雪」はなく、その冬初めての「雪」は11月11日である（後述する）。その10月になぜ雪の句があるのか。理由はいくつか考えられる。(a) 「繩帯の……」の作句の朝、小雪がちらつく（風花）程度で「雪」と記すほどではなかったということか？ ただ、“けきの雪”がこの句に絶妙な緊迫感がもたらしていることからすると、それ以上の雪が降った日の作句と思われる。とすると、(b) 雪が降った11月の作句ではあるが、何らかの事情で10月に回したか、あるいは、(c) 文化12年以前（異年次）の雪（冬）を回想して詠んだ句を文化12年10月に回したか。いずれにせよ、当初は、そういう体裁（構成・配置）に少々違和感を覚えた程度であった（“そういうこ

¹² 丸山・前掲『七番日記（下）』471頁～472頁の「『七番日記』解題」の「記載」の箇所を参照。

ともあるのだな”と)。

ところが、その後、更に不思議な場面(下記(4))に遭遇し、もはやここは自ら踏み込んで考える他ないと思ったのである。

(4) 文化12年9月下段余白に「文化12年10月部」として43句(10月作句の一部)が挿入追記され、その33番目～38番目に“はつ雪”の3句(ほかに“はつ氷・氷”の3句)が並んでいる(「はつ雪と呼(よばは)る小便序(ついで)哉」「うら町は犬の後架もはつ雪ぞ」「はつ雪やつくば(筑波)つづきの堀田原」「さい銭〔が〕追ひかけ廻る氷哉」「拵(こしら)へたやうな紅葉やはつ氷」「福鼠渡り返せやはつ氷)。しかし、文化12年冬の初雪——日記上の初雪、すなわち、一茶にとっての初雪とっておこう——は11月11日である(この日、一茶は、長久山本行寺に入っている)。降雪のない10月に“はつ雪”が3句もあるのは不自然である。「文化12年10月部」がなぜこのような体裁(辻褃の合わない構成)になっているのか。異年次の初雪を回想して作句したとは思われない。もしかすると、この“はつ雪”3句+氷関連3句は、文化12年10月ではなく同年11月の作句かも知れない(上記(3)の(b)の場合と同じ——詳しい考察は4で)。

2. 文化11年“はつ雪”“雪”の作句と挿入追記例

まずは、文化11年の挿入追記例を見てみよう(以下、『七番日記』の日付を便宜上算用数字で表した)。
 <一茶の動向：文化9年(50歳)6月12日江戸発⇒6月18日柏原着⇒8月12日柏原発⇒8月18日江戸着⇒11月27日江戸発⇒11月24日柏原着(「これがまあつひの栖か雪五尺」。初めは借家住まいで、弟専六と二分した実家で暮らし始めたのは文化11年2月21日から)⇒文化10年1月26日「熟談書付之事」(専六と和解)⇒6月18日より上原文路(善光寺門人)宅にて病臥⇒9月5日長沼⇒9月12日柏原着⇒文化11年2月21日家を専六と分ける⇒4月11日菊と結婚⇒8月9日江戸着(「9晴 谷中 本行寺入」/8月11日『三韓人』刊行：江戸を離れるに当たっての記念集)⇒12月17日に江戸発(「17晴 江戸出立 於白山下 逢春甫」：春甫は長沼六地藏(長野市穂保)の人で一茶の門人、狩野派の画を学び、世に知られる『俳諧寺 一茶肖像』は春甫の筆による)⇒12月25日柏原着(「25 旦雪 晴 柏原二入」)。『七番日記』文化11年11月(天気蘭)の「6雨 夜雪始」「7雪」(6日夜から7日にかけて初雪か)「9雪」「12雪・終日」「15雪」等は江戸出立前の江戸の雪となる。この頃、一茶は松井(日本橋)や本行寺(日暮里)に滞在している。>

11月の作句数は72句、その後方の所に雪関連7句(はつ雪・雪仏・雪磔・一握りの雪・けさの雪等)がある。そして、11月の最後に「此次7月部二有」と付され、これを受けて33句(11月に収め切れなかった?)が同年7月の余白に(「11月分」として)挿入追記されている。そこには、雪関連11句(雪・氷柱・はつ雪(5句)等)がある。要するに、文化11年11月の作句については(雪関連の作句を含む)、①11月に「72句」が記入され、②7月の余白に「11月分」として33句が挿入追記された、という形になっている。11月の“はつ雪”の句は、上述のように、6日夜から7日にかけての雪景色(日本橋や日暮里(谷中)を含む江戸の雪景色)を詠んだものと考えられる。

3. 文化10年の“はつ雪”“雪”の作句と挿入追記例

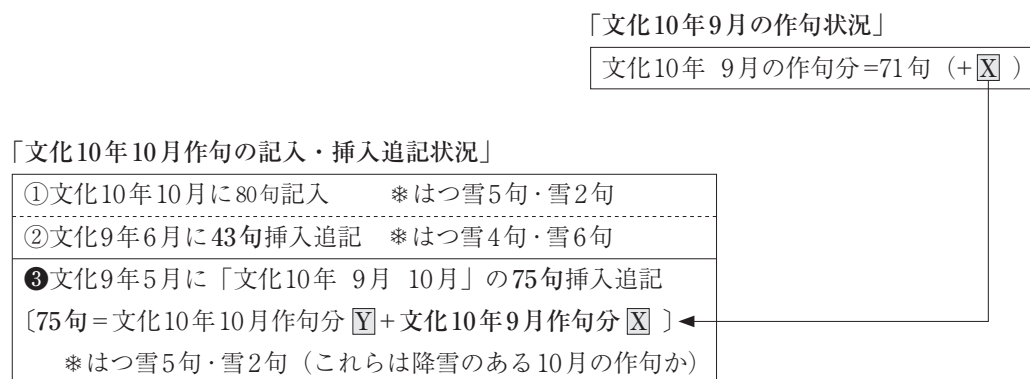
次に、文化10年の挿入追記例を見てみよう。上述の通り、文化10年6月18日より一茶は“できもの”のため善光寺の門人上原文路宅(桂好亭)で75日間病臥し、9月5日に長沼、9月12日に柏原へ帰還している。文化10年は江戸(東都)に入っていない(その後、江戸に入ったのは翌文化11年8月9日である)。

(1) 文化10年10月の作句は3か所に記載され、10月以外への挿入追記がやや複雑になっている

(推理を踏まえて作成した下記【作句・挿入追記の相関図〈1〉】を適宜ご覧頂きたい)。

- ①文化10年10月に80句が収められ、その中にはつ雪5句・雪2句がある(10月の最後に「此次9年6月ニ入」と付され—10月に書き切れなかったのであろうか—43句が②へ回されている)。
- ②上記の「此次9年6月ニ入」を受け、文化9年6月(6月作句6句の後ろ)の余白に43句(はつ雪4句・雪6句ある)が挿入追記されている(最後に「是文化10年10月分」と付記されている)。そこでも書き切れなかった(?)10月の作句分(句数=Yとする⇔下図参照)が9月作句の一部と共に文化9年5月(次の③)へ挿入追記されている(ただ、そのことを予告する説明—従来通りなら「此次9年5月ニ入」となろう—はない)。
- ③文化9年5月の余白に「文化10年 9月10月」と付された75句が挿入追記(はつ雪5句・雪2句ある)されている。文化10年9月の個所には9月作句の71句が載っている(はつ雪・雪の句なし)、上記文化9年5月の余白に挿入追記された「文化10年 9月10月」の9月作句分(句数=Xとする⇔下図参照)は、文化10年9月作句の71句以外のものであるという理屈になる(文化10年10月作句数=80+43+Y/文化10年9月作句数⇔71+X)。

【作句・挿入追記の相関図〈1〉】



(2) 文化10年10月の天気欄には「5晴 東山雪」「14雨交雪」「23雪」¹³とあり、10月の最後に「雪2」(10月降雪日の合計)とあるが、この「雪2」は、「14雨交雪」「23雪」のことであろう(「5晴 東山雪」は“あられ”が降りそうな空模様(晴れであるが東山は雪で急激に気温が下がりそうな状況)を思わせる—実際、10月下段の1句目から5句目まで霰の句が並ぶ(「玉霰……」「玉霰……」「……あられ哉」「……あられ哉」「散丸雪(ちるあられ)……」)。はつ雪は、14日の雨交じりの雪より23日の雪が似つかわしい—文化10年冬のはつ雪の句は、10月23日頃の郷里近辺(柏原・善光寺・長沼近辺)の景色を詠んだものと思われる。<なお、初雪後の雪は翌11月であり、日記に「1晴……戌刻雪」「4陰 夜雪」「5雪」「8晴 夜雪」「9晴 時々雪」「10晴 且風花雪」「11晴 辰ヨリ雨後雪」「16且雪」「22雪 昼ヨリ晴」、そして、雪の合計「雪3」とある(どの日が「雪3」か不明)。注意したいのは、11月の89句中に雪5句の他にはつ雪7句がある点である(他所への挿入追記なし)。また、翌月閏11月の天気欄に「7且小雪昼晴」「15寅刻ヨ

¹³ 丸山・前掲『一茶七番日記(上)』415頁～413頁参照。

り雪」「20雪」「25晴 夜大雪」「28晴 大雪」、そして、雪の合計「雪2」とあり（どの日が「雪2」か不明）、この閏11月の79句中に雪10句の他にはつ雪1句がある（他所への挿入追記はない）。この11月のはつ雪の句も閏11月のはつ雪句も10月23日（この冬の初雪）に作句しそれを11月に挿入したのか、または、11月に10月の初雪を回想して作句したのか、定かでない。>

4. 「文化12〔年〕10月部」と同年9月への挿入追記の真相は？

(1) 以上の考察を踏まえ、「焚くほどは風がくれたるおち葉哉」のある「文化12年10月部」に進もう。ここから先は、随時、次頁の【作句・挿入追記等の相関図〈2〉】（これも推理を交え作成した）を参照して頂きたい。10月への記入や他所への挿入追記が文化10年10月の場合よりも一層複雑になっているからである。

①文化12年10月の作句分として82句を10月に記入し（雪1句あり：「繩帯の……」）、その後ろに「此次9月ニ入」と付記し、10月作句数を164句としている。

②文化12年9月の日記を見ると、初めに9月作句分24句が載っており（雪関連作句なし）、その後ろの余白に「文化12年10月部」として10月作句分43句が挿入追記されている（そこに、はつ雪3句（「はつ雪と呼（よばるる）小便序（ついで）かな」「うら町は犬の後架もはつ雪ぞ」「はつ雪やつくばつづきの堀田原」）のほか氷1句、はつ氷2句あり）。その43句の後ろに「此次文化9年10月ニ入」と付記されている。

③文化9年10月を見ると、初めに当月（文化9年10月）作句の28句があり（うち雪関連の1句「雪ちりて隣の白の笈（こだま）哉」がある——白とは白井峠（碓氷峠）のことか）、その後ろの余白に「文化10年夏」の2句（雪関連作句なし）、「文化11年春」の33句（雪関連作句なし）、「文化11」の23句（うち雪関連1句「初雪やとの給ふような仏哉」あり）、最後に、②の「此次文化9年10月ニ入」を受けて「文化12年10月部」の39句（38句+1首）が挿入追記されている（雪関連作句なし）。

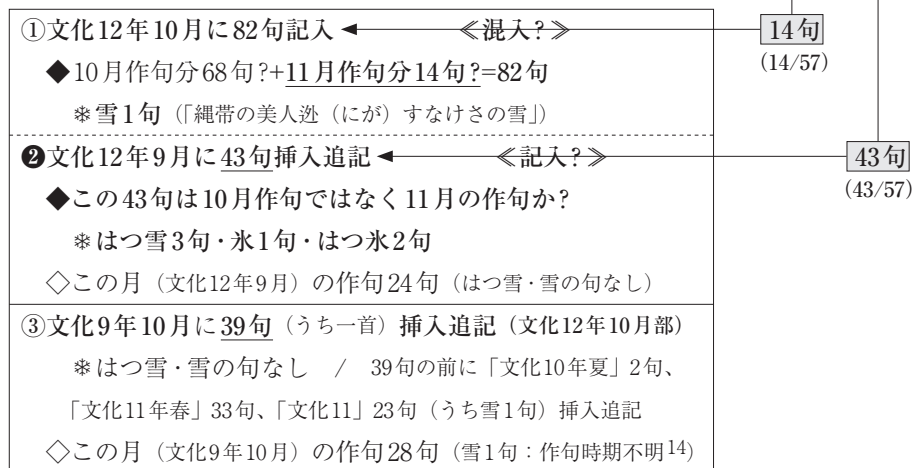
ところで、この冬の初雪は11月11日であるが、②の「文化12年10月部」になぜ“はつ雪”の句があるのか。この辺りの謎を探ってみよう。

【作句・挿入追記等の相関図〈2〉】

「文化12年11月の記入状況」(初雪：11月11日)

31句 (小計)：※はつ雪3句・雪10句・はつ氷1句
26句 (小計)：※雪1句
57句 (不明)：10月と9月の2か所へ? (混入?記入?)
三ノメ：31句 (小計) + 26句 (小計) + (57句不明) = 114句
四ノメ：114句 + 9句 = 123句

「文化12年10月作句の記入・挿入追記状況」(3分割)



◀ 82句 + 43句 + 39句 = 164句 ▶

【文化12年の動向・旅程】9月8日江戸へ (本行寺入) ⇨ 12月21日江戸出立 ⇨ 28日柏原帰着。〔9月の宿泊地と日数〕善光寺3好2・旅5・本行寺1・松井5・椿丘1・馬橋6。〔10月の宿泊地・宿泊日数〕松井12・大川3・長久山8・高谷 (市川市高谷) 5・布川5。〔11月の宿泊地・宿泊日数〕布川6・箆2・馬橋2・松井4・長久山2・海岸山 (高谷の安養寺) 1・ツガノ (千葉市中央区曾我) 1・木皿ツ (木更津) 4・スハ原 (諏訪原¹⁵) 2・百首 (富津市竹岡) 1・勝山 (鋸南町) 1・元織 (南房総市本織) 1・久保 (南房総市千倉町久保) 1・保田 (鋸南町) 1。この冬の初雪11月11日に松井から長久山本行寺に移動している。】

(2) 上の図に沿って“三段の推理”を交えつつ真相に迫ってみよう。

(ア) 第一段の推理：「文化12年10月部」として9月に挿入追記した43句 (上記②) は雪の降った「11月」の作句であるが、これが10月作句として9月に挿入追記されたのではなかろうか。43句中、

¹⁴ 「雪ちりて隣の白の笹哉」の句 (なお、『七番日記』文化9年11月21日に「白井峠大吹雪 沓掛 木屋作左エ門泊」とあり (24日「柏原二入」)、下段の後方に「白井峠」と付した「しなのぢ (信濃路) の山が荷になる寒さ哉」の句がある) ——この後に「双樹仏」と付し、(哥)「折々のなむあみだ仏を聞しりて米をねだりしむら雀哉」がある。「双樹仏」とは、「下総流山の俳友。秋元三左衛門。文化9年10月27日没。56歳。菩提寺光明院に葬る。……『米をねだりし』は、双樹に米銭の援助を乞うたことをいう」(丸山・前掲『七番日記 (上)』303頁の注⑧) とされる。

¹⁵ 「スワ原」とは、木更津市「下内橋字諏訪原のこと…諏訪原という字名は、小林一茶の『七番日記』中、文化12年…11月20日の記事にも見出すことができる。」(高崎芳美「道標から見た古道『久留里道』と歴史史料-古道復原と地域史料教材化の試み」(2005年・千葉県立中央博物館研究報告・人文科学9巻1号) 38頁参照。

はつ雪・はつ氷・氷関連が6句あることから十分成り立つ推理である。そこで、11月の作句状況（他所への挿入追記も含め）につき、【作句・挿入追記等の相関図〈2〉】の「文化12年11月の記入状況」をご覧頂きたい。まず、31句（小計・うち雪関連13句）と26句（小計・うち雪関連1句）の合計が「三メ114句」となっている。正しくは31句+26句+○句=114句（三メ）となるはずだが、現に載っているのは二メ分（31句+26句）の57句であり114句に57句足りない（114句-（31句+26句）=57句）。そして、次に、最後の9句（雪関連作句なし）を加え11月の合計が「四メ123句」となっている。問題は、「三メ114句」の部分（57句が抜けている）である（31句+26句+（57句）=114句（三メ分））。

（イ）第二段の推理：それでは、その57句はどうなったのか。多分、57句中の43句が9月へ挿入追記され（上図②⇨57句-43句=14句が残るがこの14句については次の（ウ）へ）、その際（本来「文化12年11月部」なのだが）「文化12年10月部」と付記されたのではないか（上記のはつ雪関連3句の他に寒月・枯菊・ビハ（琵琶）の花・茶の花・寒菊等、冬を詠んだ句が多数載っていることもその証左となろう。もっとも「春念仏がうるさい連（とて）や尸帰る」「夏 朝起きが薬といふぞほとゝぎす」等の春や夏の句も混じっている）。手帖にメモした多数の句を『七番日記』へ転記・挿入追記するうち複雑化し不整合が生じたと思われる。

（ウ）第三段の推理：上の9月に挿入追記されなかった14句分は、10月部に挿入追記され（上図①への「混入?」）、その結果、文化12年10月作句数が82句となったのではあるまいか（68句（もとの10月作句分）+14句=82句）。このように考えると、まだ雪の降っていない10月に11月の作句と思しき「縄帯の美人逃すなけさの雪」¹⁶があることも頷ける。11月の降雪は11日（初雪）だけだから、この初雪が“けさの雪”となる。この前後に並ぶ「大珠洲を首にかけたるかれの（枯野）哉」「枯の原（枯野原）俵かぶつて走りけり」「恋人をかくした芒かれにけり」「此やうに枯れてもさはぐ芒（すすき）哉」等の冬（仲冬）等の句も第三段の推理を補強してくれる。

二 善光寺「人日本堂」及び堀田原「はつ雪」を通して

『七番日記』の個々の句が“いつ”“どこで”詠まれたか、多くは定かでない。もちろん明確な句もあるし、日記の天気や移動先から特定できる句もある（本編の「焚くほどは……」の考察（「はじめに」を参照）は後者の例である）。作句の背景を想像する面白さは格別である。文化12年の興味深い例をいくつか見てみよう。

1. 文化12年正月・善光寺「人日本堂」の場合

文化12年正月の日記に、「6晴 昼雪 後晴 善光寺二入」（柏原から長野善光寺まで旧北国街道経由で30km弱、徒歩6時間弱）、「7晴 卯刻詣本堂」とあり、下段に「人日本堂」として「人の日や本堂いづる汗けぶり」の句がある。人の日とは、「1月7日。善光寺では七草会、御判頂戴などの行事があり、

¹⁶ 縄帯の美人につき、「罪に問われているのではないか。罪人は多くの場合縄帯をしめる。美人が縄帯をしめさせられ、縄目につくのは色恋沙汰ではないか。……罪人である可能性は高い。その縄つき美女がかごに乗せられず、朝早く刑場にむかって歩かされている。そして彼女の背に雪がふりかかっている。一茶は精一杯情をこめて、雪に対して逃すなとうたっている」との見解がある（小林雅文『一茶と女性たち-小林一茶を理解する二百三十一句』（2004年・三和書房）150頁）。私はこれと異なり、「縄帯の……」の句の背景が次の句「恋人をかくした芒かれにけり」によって鮮明化されている面白さに惹かれる。“縄帯姿の美人が朝帰りか、一夜を過ごしたのかな……初雪がちらついて戸惑っているみたいだ、どっちへ行くのだろう、雪よ、彼女を急がせるな、逃がさないでくれよ”と。

参詣人が群集した」¹⁷という（現在も七草会（ななくさえ）は「善光寺の年中行事のなかでももっとも荘厳な法要」¹⁸とされる）。一茶は、7日の卯刻（日出：午前6時前後）に善光寺本堂に入った。作句の経緯も背景も明確である。<『七番日記』によれば、一茶は、前年文化11年12月25日以降柏原におり（「29吹雪」「30吹雪又晴」、年が明け「1晴」「2晴」「3吹雪 夜大雪」「4終日吹雪」「5雪 午刻ヨリ晴」）、6日以降「6晴 昼雪 後晴 善光寺ニ入」「7晴 卯刻詣本堂」「8晴」「9晴 長沼ニ入」「10晴 申下刻雪 呂芳ニ入」「11晴 申刻ヨリ吹雪」「12陰 北風吹雪 柏原ニ皈」となっている¹⁹。年末年始を通して柏原・長野は晴もあるが雪が多い。>

酷寒の正月7日早朝、善光寺本堂の七草会は参拝者で大混雑、句から熱気が伝わってくる。約8か月前の文化11年4月11日に菊と結婚した一茶は、人混みに揉まれながら祈願したに違いない。“子宝に恵まれますように”と。翌文化13年4月14日に長男千太郎が生まれた（文化13年3月の余白に「小児の成長を祝して」と付し「たのもしやてんつるてんの初裕」「涼風の吹木へ縛る我子哉」等を載せている²⁰。千太郎は同年5月11日に死去）。<なお、文化11年4月の下段の最後に「此次文化10年12月ニ入」とあり、これを受けて文化10年12月に23句（+1首）が挿入追記されているが、それにはなぜか（文化11年4月の部でなく）「文化11年8月の部」と付されている——ここは、これ以上詮索しない。>

2. 文化12年11月の「〔はつ雪の〕むだぶりしたり堀田原」の場合

（1）文化12年9月へ挿入追記された「文化12年10月部」43句中に「はつ雪やつくばつづきの堀田原」があったが（上述・一の1の（4））、「はつ雪」の堀田原の句がもう1句ある。文化12年11月の31句（上記関連図〈2〉の【文化12年11月の記入の状況】の31句）中の「〔はつ雪の〕むだぶりしたり堀田原」である——この句の方が作句日を絞り易い。文化12年11月10日～15日の天気を見てもよう。度々触れたが、11月11日にこの冬初めての雪の記録がある。

10晴 松井ニ入 ⇨日本橋久松町の松井泊

11雪 入長久山 <この冬の初雪か> ⇨日暮里の本行寺泊

12陰 ⇨本行寺泊

13晴 松井 六百文股引 ス田丁（神田須田町） ⇨松井泊

小田や

百八十文 足袋

百六十文 〉

四十四文遣

14晴 松井 ⇨松井泊

15陰 辰刻霰 未刻酉刻雨……高谷入 海岸山ニ入 ⇨高谷泊

<現都営新宿線「岩本町駅」の西（神田川万世橋南）が須田町。14日の日記に「柏原書通出ス」の他「金二分入 過人団七」（団七：牟礼村小玉の飛脚）「二朱三百文 非（被）布」「四百四十文 羽折（織）」「四十文 長恨歌」「百文 綿」「百廿二文 只」とあり、13日・14日に様々購入し（旅支度か）、15日以降に下総・上総方面へ：15高谷・海

¹⁷ 丸山・前掲『七番日記（下）』113頁の注①。

¹⁸ 善光寺の説明によれば、七草会（1月7日）は、「午前3時から行われる、善光寺の年中行事のなかでももっとも荘厳な……深夜に行われる法要ですが、一般の方もお参りいただくことが可能です……」とある（善光寺HPにて「年中行事」を検索）。

¹⁹ 丸山・前掲『七番日記（下）』108頁～112頁参照。

²⁰ 丸山・前掲『七番日記（下）』218頁。

岸山⇒16ソガノ⇒17木更津⇒20諏訪原ほか（前掲【作句・挿入追記等の相関図〈2〉】の下の「文化12年の動向・旅程」の「11月の宿泊地・日数」を参照）。>

11月の最初の小計31句中、はつ雪・雪・はつ氷（他にあられ）関連が13句ある（「作句・挿入追記等の相関図〈2〉」の【文化12年11月の記入の状況】の31句の箇所）。<「うら口や曲げ小便もはつ氷」/「でも花の都で候（そろ）か汚れ雪」/「住ば又くそ（糞）新道もはつ雪ぞ」/「大雪に犬めがよけて居たりけり」/「有様（ありよう）はいまいましいぞ門の雪」/「はいかいを守らせ給へ雪仏」/「初物ぞうすつべらでもおれが雪」/「三弦（さみせん）で雪を降らする二階哉」（吉原）/「身一つにあらし木がらしあられ哉」/「雪の日や天井張らぬ大御堂」/「一吹雪尻つんむけて通しけり」/「はつ雪や貧乏樽の寝たなりに」/「はつ雪のむだぶりしたり堀田原」>

11月11日の本行寺付近（日暮里・谷中）が雪なら松井（日本橋久松町）付近も雪だったであろう（約5kmしか離れていない）。上記の雪の句は、11日（松井⇒長久山（本行寺）泊）・12日（長久山泊）・13日（長久山⇒松井泊）・14日（松井泊）のいずれかの雪景色を詠んだものと思われるが、それ以上の絞り込みは難しい（「身一つにあらし木がらしあられ哉」の“あられ”は、「15陰 辰刻霰 未刻酉刻雨……」²¹の“霰”か）。

（2）では、「〔はつ雪の〕むだぶりしたり堀田原」はどうか。「むだぶりしたり」と言っているから初雪の数日後のことであろう。堀田原とは、「出羽山形藩堀田氏の屋敷跡の広い原。今の台東区寿、蔵前北部一帯の地」²²とされる（蔵前神社の北側で現在の厩橋の西：蔵前3丁目19及び寿3丁目5付近）。地図を見ると、日本橋久松町（松井）から堀田原まで約2km、徒歩で26分前後である（江戸の地図には「堀田原の馬場」が載っている）。上述の宿泊状況も考慮すると、作句日は、「11雪」（はつ雪）後の13日（松井泊）か14日（松井泊）に絞られる。強いて言うなら、15日以降の旅支度のため13日に前日神田須田町で股引・足袋を新調し、14日に「柏原書通出ス」（買い物もしている）ついでに堀田原の雪景色見物に出掛けたのではなかろうか。ただ、13日も14日も「晴」なので、折角のはつ雪も大方融けていたのだろう。まさに、「むだぶりしたり」である。拍子抜けして堀田原を眺める一茶の姿が目浮かぶ。

（3）「文化12年10月部」の「はつ雪やつくば（筑波）つづきの堀田原」の句も11月14日（あるいはそれ以降）の作句（または当日を回想しての作句）であるが、それを9月に挿入追記したものであろう。このように、『七番日記』下段の“はつ雪”や“雪”の句と上段の記録（日付・天気・移動先）との間に必ずしも相関関係（ないし対応関係）がある訳ではなさそうである（はつ雪や雪の場合のみならず全般的にそのように思われる）。

三 文化12年9月「お竹大日如来」・同年7月「廿 晴 諏方社二軍書談始」の不思議

1. 文化12年9月「お竹大日如来」の謎

はつ雪から逸れるが、9月に登場する「お竹大日如来」について探ってみよう。ここにもいくつか謎が潜んでいる。

◆「12陰 夕雨 子刻ヨリ大雨 鶏鳴ニ不止 金令 木卯 お竹大日如来詣」（一茶は9月11日に松

²¹ 本編36頁において、『七番日記』には、「霰」「あられ」も度々出てくるが、「日記に霰の表記はない」と書いたが、これを訂正する。上記のように「辰刻霰」のような表記もあるし、また、文化8年正月の16日の天気欄には霰と表記されている。この15日は（西暦1815年12月15日）、陰（曇）で寒く、朝8時前後に霰が降り、午後2時前後・4時前後に雨が降ったのであろう。

²² 丸山・前掲『七番日記（下）』171頁の注②。

井に入っている。金令は「金令舎。道彦の庵号。木卯も江戸の俳人。」²³なお、金令は「仙台出身の医家……本名鈴木由之、十時庵、金令舎などの号がある。寛政以後文政初年まで江戸俳壇に政治力をふるい、一方のボスの存在であった」²⁴ともされる。金令と木卯がお竹大日如来詣の折、松井に立ち寄ったかも知れない。) ◆「21晴 お竹大日如来詣 本行寺二入」(馬橋から移動。この日のお竹大日如来詣は、浅草寺念仏堂(出開帳)での出来事であろう-後述)。◆「25晴 お竹大日如来全(同)宝物 タスキ ナガシ 茶釜 松井二入」

“お竹大日如来”が立て続けに3度登場するが、何か訳でもあるのだろうか。<上述のように、一茶は、文化9年12月、江戸を引払って柏原に帰住し当初は岡右衛門方で借家住まい、文化11年2月(52歳)に生家を弟専六と二分し借家から引っ越した。同年8月9日江戸・谷中(日暮里)本行寺に入り12月25日柏原へ帰着。翌12年9月8日本行寺に入り(⇒お竹大日如来詣はこの江戸滞在中の出来事となる)、12月28日柏原に帰着。>

(1) お竹大日如来とは、「元和(1615~24)・寛永(1624~44)のころ、江戸の大伝馬町一丁目の豪商で名主の佐久間家の下で働いていたお竹という名の女性が、大日如来として出羽国羽黒山の黄金堂に祀られたもの」²⁵であり、お竹のお墓が北区赤羽西の善徳寺(後述(5))にあり、お竹の使った井戸跡が日本橋本町の小津本館ビル敷地内にあり、お竹堂が港区東麻布の心光院にある。心光院の説明によると、「江戸庶民にも知られた『お竹大日如来』の流し板が当院に奉納されており、お竹の奇特に感銘をうけた桂昌院(五代将軍綱吉公生母)より、袋と箱が寄進され……その後、宝暦11年(1761)……増上寺赤羽門外の芝赤羽橋際へ移転し……昭和20年(1945)の戦災により、赤羽心光院の堂舎は空襲を受け……ご本尊の頭部と表門は焼失を免れ……昭和25年……心光院は現在地へ移転……江戸伝来の表門を移築し、本堂は昭和30年に落成」²⁶したとある(下線及び太字は後藤に拠る)。一茶の頃、心光院は「増上寺赤羽門外の芝赤羽橋際」(現在の都営大江戸線赤羽橋駅の地上付近)にあったのである(お竹堂は昭和41年建立・平成29年再建⇒注26)。

²³ 丸山・前掲『七番日記(下)』167頁の注⑧。

²⁴ 矢羽勝幸『人と文学-小林一茶』(2004年・勉誠出版)91頁。

²⁵ 高山慶子「お竹大日如来と江戸の庶民信仰-『懐溜諸屑』を手がかりに」(国立歴史民俗博物館研究報告第222集(2020年)53頁を参照(丸山・前掲『七番日記(下)』135頁の注⑥も参照)。羽黒山荒澤寺正善院の解説によると、「……三十三年間にわたって遠く湯殿山の参詣を続ける乗蓮という行者が……満願の参詣を終え、玄良坊という宿坊で身体を休めていると、不思議な夢のお告げがあり……『お前の信心を讃え、生身の大日如来を拝ませよう。江戸大伝馬町の佐久間勘解由のもとに参りお竹を拝め。お竹こそ、大日如来のご化身であるぞ』というもので……乗蓮の話聞いた玄良坊の主人・宣安も共に江戸に上り、佐久間家の主人に訳を話しお竹さんを礼拝すると、お竹さんの全身から光明が発せられ、二人は感極まり礼拝を繰り返した……その後のお竹さんは、ひたすら念仏三昧に明け暮れ……ついに寛永15(1638)年3月21日の朝……58歳で昇天され……お竹が奉公していた佐久間家の主人(日本橋大伝馬町の佐久間勘解由一カッコ内後藤)は、京都から仏師を招いて於竹大日如来の造像を依頼し……日夜供養……お竹さんの生まれ故郷である羽黒山の麓へ於竹大日像をお移して……寛文6(1666)年、羽黒山別当天有法印願い、羽黒山正善院黄金堂の境内にお堂を建ててお像を移し『於竹大日堂』と名付け」たとある(正善院HP「於竹大日堂」を検索。下線及び太字は後藤による)。本稿では、寺社の一般的な情報収集のため各HPを積極的に利用した。

²⁶ 心光院HP参照。なお、『古地図ライブラリー 嘉永・慶応江戸切絵図 江戸・東京今昔切絵1』(1995年・人文社)⑩芝口南西久保愛宕下之図25頁の下部に「心光院」が載っている。また、心光院の「お竹堂」案内板に、「お竹如来像と流し板をまつ。秋田県能代市出身の神成志保氏により、昭和41年に一堂が建立され、平成29年にこれを再建した。……お竹は、庄内(山形県)出身にして生まれつき慈しみの心が深く、朝夕の自分の食事を貧しい人に施し、自らは水盤の隅に網をおいて、洗い流しの飯が溜まったものを食料とし……信仰厚く常に念仏を怠らず、大往生をとげたという。この話を聞いた……桂昌院は心を動かされ、金襴の布に包まれた箱にお竹の流し板をおさめて、増上寺別院であった心光院に寄進し、その徳をたたえられた。……」とある(下線及び太字は後藤による)。

(2) 「お竹大日如来と江戸の庶民信仰」(論考⇨注25)によれば、江戸で4回「お竹大日如来」の出開帳²⁷が催され、その3回目が文化12年7月21日から60日間、浅草寺念仏堂(現在、浅草寺病院がある)で行われ、「開帳寺社は、出羽羽黒山麓玄良坊」²⁸であったという(玄良坊⇨注25参照)。一茶のお竹大日如来詣は、その時の浅草寺念仏堂(出開帳)参拝の可能性はある(お竹の使ったタスキ・ナガシ(心光院に奉納された流し板(水板)か)・茶釜等が展示されたのであろう)。

(3) 一茶がお竹大日如来詣をした文化12年の暦を調べると(「国立国会図書館「日本の暦」を参照)、大の月(30日)が1・2・4・8・10・12の月、小の月(29日)が3・5・6・7・9・11の月となっている(閏月なし)²⁹。そうすると、浅草寺念仏堂での出開帳初日(開催初日)が7月21日なら、最終日(60日目)は9月21日となる(7月21日～29日⇨9日間、8月1日～30日⇨30日間、9月1日～21日⇨21日間、計60日間)。この開催期間と一茶の(9月の)「21…お竹大日如来詣…」が重なっていることから、一茶はこの出開帳に参拝したと考えて間違いないだろう。具体的日程は二通り推測しうる。(i)一つは、出開帳が60日間連続開催(無休)であった場合、一茶は、9月21日最終日に「お竹大日如来詣」をし、その4日後の25日にタスキ・ナガシ・茶釜等の「宝物」を拝観した(終了後も「宝物」が展示されていた)ことになる。(ii)もう一つは、開催期間中4日ほど休催日があった(休催日を60日間に入れない)場合、9月25日が最終日となり、21日に「お竹大日如来詣」、最終日25日に「宝物」拝観となる。いずれにせよ、久松町松井から浅草寺までの距離が約3kmに過ぎないことや宿泊先等々を踏まえると、一茶は、文化12年9月21日(馬橋出立後)、“大賑わい”の浅草寺念仏堂「お竹大日如来」参詣後、谷中(日暮里)本行寺へ入り、25日に「お竹大日如来全宝物」拝観後、久松町(日本橋)松井へ入ったものと思われる。

(4) ところが、不思議なことに、文化12年9月の24句にお竹大日如来関連の句は一句もない。他所(異年次)にて散見しうるのみである(⇨(ア)(イ)(ウ))。≪(ア)文化12年(1815年)4月に「守るかよお竹如来のかんこ鳥」がある。閑古鳥(かっこう)は初夏の季語とされるが、他にも「くさる程つゝじ咲けりかんこ鳥」「閑古鳥つゝじは人に喰われけり」「先住のつけわり也かんこ鳥」(先代住職の伝来物なり…との意

²⁷ 参考までに「善光寺出開帳両国回向院」の記事を見ておこう。「出開帳」の概要が分かる。「平成25年4月27日(土)～5月19日(日)、江戸時代に大人気を博した善光寺の回向院出開帳を戦後初開催いたします。…東日本大震災で亡くなられた多くの方々のご供養と被災地の復興支援を目的とし、善光寺御本尊のご分身である出開帳仏、そして陸前高田の被災した松で造立された地藏菩薩像などを奉じて厳修したいと考えています。…今回の出開帳では、法要だけでなく様々な催しを予定しております。」(出開帳文化財の公開/法要として、①善光寺如来(出開帳仏)との結縁、②陸前高田の被災松による親子地藏の参拝、③びんずる尊者像との「復幸しゃもじ」による結縁、④善光寺に伝わる寺宝の拝観等があげられている。)「出開帳とは、普段拝することのできない寺院の本尊などを地方に出張し、一定期間拝むことができるよう祀ること。江戸時代に回向院で行われた善光寺の出開帳は大変な人気を誇り、中でも空前の賑わいをもたらした安永7年(1778)では、60日で1,603万人の参詣があったとも云われています。(太田南畝『半日閑話』)」とされ、「上図は、回向院で六十日間、善光寺が開帳を行った際の様子を示され…その註記では『わざわざ信州まで出向いて参詣・結縁しようという者もいるのに、如来様の方から江戸の人々と結縁するために江戸に出てきて下さる。そのありがたさを感じて、参詣するよう』と勧めたもので、上が開帳の図で、下が両国の賑わいを表した図」とされている(以上、回向院HPにて「東日本大震災復興支援善光寺出開帳両国回向院」を検索)。上述の「図」とは、「善光寺如来御開帳之図并両国広小路賑」で上下に分かれている(文中の下線及び太字は後藤に拠る)。

²⁸ 高山・前掲「お竹大日如来と江戸の庶民信仰—『懐溜諸屑』を手がかりに—」54頁参照(4回目の出開帳は、嘉永2年(1849年)3月25日から60日間、両国回向院で行われた(『藤岡屋日記 第三卷』(藤岡屋由蔵・嘉永2年(1849)記)ほか高山・同前54頁参照)。

²⁹ 国立国会図書館HPにて、日本の暦>第二章いろいろな暦>大小暦、を検索。

味³⁰「我宿を守り給ふよかんこ鳥」「藤つ、じ秋にしもあらず閑古鳥」等の寂れた情景の句が並ぶ。ただ、一茶は、この年の4月、故郷柏原におり（善光寺や長沼に出かけている）、江戸（本行寺）に入ったのは9月8日のことである（上述）。（イ）文化14年（1817年）2月に「雀子やお竹如来の流し元」がある。この年の2月1日に「松井入」、馬橋⇨布川⇨化六（守谷西林寺住職鶴老の居庵が化六菴）⇨流山と移動。（ウ）文政2年（1819年）10月に「雪の日やお竹如来の縄だすき」（『八番日記』文政2年10月）があるが、一茶はこの年江戸に入っていない。文政元年出生の長女さとが同年6月に死去し、12月に「江戸へ行こうとしたが中止」³¹になった。>

（5）一茶の頃、お竹の流し板がある心光院は「増上寺赤羽門外の芝赤羽橋際」（上述）にあり（松井付近から6km前後）、お竹の墓がある善徳寺は浅草にあった（松井付近から約4km、現在の北区赤羽西の善徳寺は「関東大震災のあと、浅草よりこの地に移転」³²した）ことなどから、一茶にしてみれば、普段から身近な“お竹如来”だったに違いない。当時の著名作家がお竹大日如来の作品を刊行しているが（文化7年：式亭馬琴『於竹大日忠孝鏡』、文化12年第3回目江戸出開帳（浅草寺念仏堂）の折：十返舎一九『お竹大日如来稚絵解』³³）、俳人一茶も出開帳後の文化14年2月に「雀子やお竹如来の流し板」（上述⇨この2月は馬橋・守谷・布川・太田と巡っている）と詠み、文政2年10月に故郷で「雪の日や仏お竹の縄だすき」（上述）と詠んでいる。注目したいのは、出開帳5か月前（文化12年4月）の句「守るかよお竹如来のかんこ鳥」である（この4月、一茶は柏原におり（長野周辺に出かけている）、江戸入は9月である）。普段の“お竹如来”（心光院や浅草善徳寺のお竹如来）は“閑散”としていたのであろう（この句の前に「先住のつかわたり也かんこ鳥」「我宿を守り給ふよかんこ鳥」といった寂れた風情の句が並ぶ）。

2. 文化12年7月「卅 晴 諏方（訪）社二軍書談始」の謎

文化12年7月は、大陰暦の「小の月」なので29日しかない。この30日（卅）は何か（30日の謎）。そして、その7月の下段に「御射山」（みさやま：諏訪大社御狩行事の祭場—後述）と題する21句がある（「野菴も徳屋お御役に立にけり」「しなの中皆すは山の夜露哉」「青ばし（箸）のちくはぐなるも祭り哉」「芒箸見たばかりでも涼しいぞ」他）。御射山は諏訪大社の御射山祭が行われる場所であるが、日記の諏訪社は諏訪大社のことか（諏訪社の謎）。

（1）先ず、30日の謎を考えよう。江戸時代、庶民にとって「大小暦」は必需であり、「月末に支払いや代金の取り立てをする商店では間違えないように『大』と『小』の看板を作り、月に合わせて店頭に掲げ……絵や文章の中に大の月、小の月を織り込み、アイデアやユーモアのセンスを競う大小暦が大流行した³⁴。文化12年の大小暦を調べると、大の月（30日）は1・2・4・8・10・12の月、小の月（29日）は3・5・6・7・9・11の月であり、閏月はなく年間日数は354日になる（前掲・国立国会図書館「日本の暦」に拠る）。一茶は、文化12年7月（小の月）に30日を書いたため文化12年の日数が1日多く355日となっている。では、7月30日の後の日付が後ろへ連鎖的に1日ずれてしまったのか。7月～12月の日記を確認すると、大の月・小の月は暦通り書かれている。また、8月に「21雨 墓詣

³⁰ 丸山・前掲『七番日記（下）』135頁の注④及び⑤参照。

³¹ 小林・前掲『一茶—その生涯と文学』387頁【一茶略年譜】参照。

³² 東京都北区観光HPにて善徳寺（解説）を検索。前掲『古地図ライブラリー 嘉永・慶応江戸切絵図 江戸・東京今昔切絵1』⑨今戸箕輪浅草絵図（1853年）46頁に東京本願寺（東本願寺）の西側に「善徳寺」が見える——現台東区立松葉小学校西側にあったようである。

³³ 高山・前掲「お竹大日如来と江戸の庶民信仰 —『懐溜諸屑』を手がかりに—」61頁参照。

³⁴ 前掲・国立国会図書館HPより、日本の暦>第二章いろいろな暦>大小暦、と検索。

且仙六食」とあることから（21日は享和元年5月21日に死去した父の月命日）、弟仙六（専六）と21日の月命日を話しあったであろうことは容易に想像できる。日にちが後ろへずれた様子は見られない。以上から推察すると、30日の誤記につき一茶自身気付いていたふしがある（ただ、訂正（30日の削除）はされなかった）。

念のため、文化期の7月の大小を見ると、元年～5年は小の月、6年～11年は大の月、12年～14年は小の月となっている（前掲・国立国会図書館「日本の暦」に拠る）。つまり、文化12年7月は、それまで6年続いた大の月が小の月に切り替わる7月（30日が存在しない7月）だったのである。多分、一茶は、手帖の7月について30日と書いた（その経緯については後述する）が“小の月”に気が付き正そうと思ったが（忘れて?）そのままになり、後年、『七番日記』に30日と転記してしまったのではないだろうか（ちなみに、8月以降の大小は正確であり、文化13年も14年も7月末日（小の月）は29日と正しく書いている。7月「30晴」は、本来、8月「1晴 午刻ヨリ蔭 南吹 申下刻小雨 内丁ニ入」へ吸収されるべきものだったのであろう³⁵⁾。

（2）次に、諏訪社の謎に入る前に「御射山」（みさやま）について瞥見しておこう。

（ア）「御射山」とは、「長野県諏訪大社の神事の祭場。上社は八ヶ岳西麓、下社は霧ヶ峰を祭場として、陰暦7月27日を御射山祭といい、芒（すすき）で小屋を葺き（穂屋という）、神官・氏子がここに泊まり、神輿の来臨に奉仕し……一般の民家でも軒に芒を葺き、芒の箸で物を食う風習となっていた。」³⁶ 御射山御狩神事もいわれ、「鎌倉幕府は全国の武将をこの神事に参列せしめ、八島高原や霧ヶ峰一帯で武芸を競わせたりして祭事を執行し、参加した武将は諏訪大神の御分霊を拝戴して任地に赴き御分社を祀ったという³⁷。今日、御射山祭（御射山社祭）は、8月26日・27日・28日、上社・下社の各御射山神社で行われるが（「萱の穂で葺いた仮屋（穂屋）に神職他が籠って祭を行うので、穂屋祭とも呼ばれる。」³⁸⁾、昔は、7月26・27・28・29・30日の5日間行われた³⁹⁾。『諏訪大明神繪詞』⁴⁰（『諏方大明神畫詞』⁴¹⁾によれば、「26日、小月25日、御射山登まし、大祝神殿を出で先前宮溝上の両社へ詣で、後進発の儀式あり……」、「27日早旦、一の御手倉、大祝以下大小神官櫛を捧て山

³⁵ なお、『七番日記』文化9年4月（小の月）が28日で終わっているが、天候の集計に大晴12・雨13・中晴5日・陰4とある。「中晴5日」は「雨13」の中に晴間の覗いた日が5日あったということだろうから、12+13+4=29日となる（この集計の後ろに「3月28日より富津止（泊）」とあるから29日も富津にいたのであろう。日記下段の最後に上総国富津の浦の「耳つ貝」（耳貝）のことを縷々記している）。また、同11年2月も28日で終わっているが、天候の集計では晴21・雨6・半晴2（計29）となっている。同12年3月に29日が2度出てくる——1度目の29日の個所に翌月4月28日の出来事を長々と「挿入追記」したことから、その後ろに29日を再記入したと思われる。

³⁶ 丸山・前掲『七番日記（下）』155頁の注⑥。

³⁷ 諏訪大社のHPにて、神事・行事の「御射山社祭」を検索。

³⁸ 『信濃國一之宮諏訪大社由緒略誌』による。なお、富士見町指定史跡「御射山社」の解説版に「祭事は旧暦の7月26日から30日までの5日間にわたり、穂屋（ススキで囲った仮屋）を造営して大祝・神長官をはじめ多数の神官や武士などが参籠し、狩りを行って獲物を神に供え、豊作を祈願し、また流鏑馬などの武技競べも行われたと伝えられ」とある。（下線は後藤による）

³⁹ ほかに「押立御狩」（5月2・3・4の3日間）、「御作田御狩」（6月27・28・29日の3日間）、「秋穂御狩」（秋尾御狩・關廬御狩とも称され9月下旬の3日間）がある（白井忠功「諏訪大社・御射山祭について」（1997年・立正大学人文科学研究年報別冊11号）23頁、森隆男「諏訪社の祭祀と仮屋」（1999年・『近畿民族』154巻）9頁～10頁等を参照）。

⁴⁰ 『信濃史料叢書第三巻』（1913年・信濃史料編纂會）「諏訪大明神繪詞」34頁～36頁。

⁴¹ 『復刻諏訪史料叢書第一巻』（1985年・諏訪教育会編）「諏方大明神畫詞」40頁～42頁参照。

宮に詣づ……」、「28日、神事、法則昨日の如し……」、「29日、祭礼の條々又昨日に同じ……」、「晦日、下御、早旦、四御庵にして、神事饗膳例のごとし、大祝神官等着座、先御符を両頭の代官に下す、総じて一年中、役人十餘輩、皆丹誠を拵て、一生の財産をなく、されば謀叛八逆の重科も、頭人寄子悉く武家の免許を蒙て生涯を全する事、古今断絶せず、其子孫未だり、神徳の至誠不思議なり、又明年の頭役を差定て後、面々に打立て山に出づ、横木立て上矢を射立て、たむけとす、鹿草原にして草鹿を射て各さとに帰る」とされている⁴²。

(イ) 以上から、文化12年7月の「30…諏訪社…」は「30…諏訪大社（御射山御狩の5日目）」のことと解するのが素直である。また、7月に収められた御射山の作句のことも理解し易い。ただ、文化12年7月は「小の月」なので御射山御狩の5日間も25・26・27・28・29（晦日）となり、「30」と整合しないことになるが、この点も含め以下の (iii) で考察する。

(i) その前にもう一つ別の根本的な謎がある。実は、文化12年7月に一茶が諏訪を訪れた形跡がないのである。何故そこに御射山の句が21句もあるのか。<文化12年7月前後の動向（数字は日付）。6月：3梅松寺（小布施）⇒9長沼⇒10浅野⇒12毛野⇒13柏原⇒18赤川⇒19野尻⇒20柏原⇒21毛野⇒22長沼内町⇒24柏原。7月（「長沼での一茶句会『月花会』が再開」⁴³）：1長沼内町⇒4上町（長沼）⇒6善光寺⇒8柏原⇒11野尻⇒16毛野⇒18長沼上町⇒20柏原⇒21墓詣⇒22「出辰刻柏原…善光寺…アサノ（浅野）」⇒24六川（小布施）⇒26長沼内町・経善寺⇒29上町（⇒30「諏訪社二軍書談始」）。8月：1内町（長沼）⇒2毛野⇒4柏原…とある。>

そもそも、『七番日記』（文化7年～15年：48歳～56歳）に一茶が諏訪を訪れた記録がない。ということは、「御射山」の句は、文化7年以前に訪れた時のものと考えざるを得ない（同じことは、文化14年10月（当月は他郷（長沼ほか）9日・在菴20日）の「諏訪湖」と題した句「米負て小唄で渡る氷哉」（次に「野仏の御鼻の先の氷柱哉」が並ぶ）にもいえる。なお、文化14年10月の柏原は雪が多く、雪17句、はつ雪5句（「12陰 夕雪」が初雪か）、氷6句ある）。

(ii) では、いつ諏訪を訪れたか（これに言及する文献が見当たらなかったため、以下は私見による）。一茶は、安永6年（1777年）15歳で江戸へ出て10年間は「消息不明」⁴⁴とされるが、25歳で素丸の執筆（『真左古』の執筆）をしていたことから、「少なくとも22、3歳ころから素丸に入門していたであろうことは推測にかたくない」ともいわれる（「執筆」とは、「将来俳諧師を志す者が師匠の庵に同居し、俳諧のみならず庵の雑用なども手伝った内弟子のこと」であり、『真左古』とは、「長野県佐久郡佐久町上海瀬の新海自的が米寿を迎えた父米翁のために出版した記念賀集……もともと素丸は自的の住む佐久地方の俳人たちと関係が深く、宝暦ごろから交渉があった」という）⁴⁵。もしかすると、この頃、佐久・諏訪方面へ出掛けたかも知れない。寛政4年（1792年）、30歳の時「御射山や一日（ひとひ）に出来し神の里」と詠んでいるので（『寛政句帖』⁴⁶）、それ以前に諏訪を訪れたことになるが、詳細は分からない。

(iii) そんな中、一茶の諏訪紀行に繋がりそうな言及が目にとまった。一茶は、寛政4年に西国へ

⁴² 前掲・『信濃史料叢書第三巻』36頁（諏訪祭六の箇所）。

⁴³ 矢羽・前掲『人と文学－小林一茶』236頁（「年譜」の1815年・文化12年7月の箇所）。

⁴⁴ 小林・前掲『一茶－その生涯と文学』の「一茶略年譜」379頁参照。

⁴⁵ 矢羽・前掲『人と文学－小林一茶』16頁～17頁。

⁴⁶ 丸山一彦校注『新訂 一茶俳句集』（2004年・岩波文庫）18頁。

出立し、同10年(1798年：一茶36歳)6月に「京をたち大津、堅田の居初家を訪問。木曾路から帰郷」⁴⁷したというのである⁴⁸(堅田(現大津市堅田)琵琶湖西岸の豪族居初氏の「居初氏庭園(天然図画亭)」が有名。太字及び下線は後藤による)。大津・堅田訪問の後、木曾路経由の帰郷なら諏訪に立ち寄ったとしても不思議はない。時期的にも御射山御狩(7月下旬)に近い。とすると、御射山関連の21句はその時のものか? 17年前の御射山御狩を回想して作句したか、または、17年前の作句(別の古い手帖に当時の作句がメモしてあった?)を文化12年7月に挿入したか、どちらも(17年経過しているが)可能性はある。つまり、「30…諏訪社…」は「30…諏訪大社(御射山御狩の5日目)」の事であり、「御射山」の21句は寛政10年7月の御射山御狩を詠んだものであって、それを文化12年7月30日の日付(“大の月”と思い違いをしていた-前述)で書いた(この日は門人松井松宇の住む長沼上町に滞在)のでは、と想像する。なお、17年前の寛政10年7月も小の月で30日はないが(前掲・国立国会図書館「日本の暦」に拠る)、一茶の心象に残る御射山御狩5日目は他でもない“卅”だった(そういう思い込みがあった)のではなからうか⁴⁹。

(iv)『中洲村史』(現諏訪市中洲)に興味深い記述がある。諏訪の「大祝(おほはり)屋敷」(大祝諏方家)に、「かつて小林一茶が乞食姿でたずねてきたが、門番は一茶とも知らず追返した。一茶は『元までは来れど高し栗の本』⁵⁰と書いて去ったという。霞朝はあとから聞いてたいへん残念がったという話がある」⁵¹というのである(大祝とは、「諏訪明神のよりしろ、現人神として諏訪社の頂点に位置した役職で、上社大祝は古代から近世に至るまで世襲され「諏訪氏」を名乗った。中世までは諏訪の領主として政治権力も握っていた。江戸時代には高島藩主の諏訪家と大祝の諏方家ができて政教分離がなされ、明治維新を経て宗教政策の転換に伴い大祝職も廃止された」⁵²という)。一茶(文政10年(1827年)没)と大祝霞朝(かちょう(頼武)天保5年(1834年) - 慶応元年(1865年))⁵³は同時代人ではないので、この「話し」を鵜呑みにする訳にはいかないが、“かつて(霞朝出生以前に)一茶が訪ねて来たことを(後年)聞いた霞朝が

47 矢羽・前掲『人と文学-小林一茶』225頁(「年譜」1798年・寛政10年6月)。玉城司(訳注)『一茶句集』(2013年・角川ソフィア文庫)「略年譜」577頁も同旨。

48 『七番日記』に木曾の句も数多くあるが、いずれも移動先との関連はなさそうである。「木曾山〔や〕蝶とぶ空も少し〔の〕間」(文化7年正月:随斎・本行寺) / 「木曾山やしごき棄も茶つみ唄」(文化8年3月:随斎・松井) / 「木曾鳥のつ・き足らぬか秋の山」(文化11年8月:善光寺・谷中本行寺・松井・守也・布川) / 「ならばしや木曾の夜寒の膝頭」(文化12年8月:柏原《在菴22日》) / 「膝頭山の夜寒に古びけり」(文化12年8月:柏原《在菴22日》) / 「鶯や今に直らぬ木曾訛」文化13年正月:長沼・六川・浅野・三好《在菴20日》) / 「木曾の茶も今やつむらんはやり笠」(文化15年3月:上町・素鏡・三好・柏原) / 「木曾山に流入けり天の川」(文化15年7月:長沼上町・三好・柏原・毛野)、となっている。木曾路の旅(寛政10年の時かどうか不明)を回想しての作句か。

49 ちなみに、一茶が江戸へ出てから寛政10年までの間に7月が大の月である年を調べると、江戸へ出た頃の安永6~7年(15~16歳)、素丸に師事した頃(『真左古』執筆)の天明3~7年(22~26歳)となる(前掲・国立国会図書館「日本の暦」に拠る)。

50 栗の本(くりのもと)とは、広辞苑によれば、【栗本衆】「鎌倉初期、俳諧連歌を作る人々称。無心衆。栗本の衆。栗本⇔柿本衆」とある(【柿本】「柿本衆の略」、【柿本衆】「鎌倉初期、和歌に範をとって優雅な連歌を作る人々の称。有心(ゆうしん)衆。柿本の衆。⇔栗本衆」)。参考まで、芭蕉の“奥の細道”に同行した門人河合曾良(慶安2年(1649年) - 宝永7年(1710年))とされるは諏訪出身(拙稿・前掲「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続」128頁~133頁参照)。

51 細野正夫・今井広亀共著『中洲村史』(1985年・中洲公民館)760頁。

52 「特別展 諏訪信仰と御柱」(2022年・諏訪市博物館)2頁。

53 「霞朝のもっとも得意としたのは俳諧で、…26歳で京都の二条家から『栗の下(ママ)』宗匠の免許をうけ…近世では栗ノ本をこの道の資格として、二条家から免許されていた…」という(前掲・『中洲村史』681頁)。なお、大祝屋敷表門近くに建つ諏方霞朝頌徳碑にも「安政六年二条家ヨリ栗の本を允許セラル、時人コレヲ榮トス…」(安政6年(1859年) ⇨一茶没後32年)とある(同前・『中洲村史』759頁にも収録)。一茶が書いて去ったという「栗の本」と何か関連あるのだろうか。

(俳諧師として) 残念がった” という趣旨であれば納得できる(「乞食姿」なら江戸へ出て間もない修業時代か(20歳代：諏訪へ?)、または西国の旅の頃か(36歳：木曾路から諏訪へ?)、50歳(柏原定住)以降ではないと思う)。

(ウ)「諏訪社」が諏訪大社だとして、そこに「軍書談」と来れば勢い武田氏の軍学書『甲陽軍鑑』を連想してしまう(武田信玄は、諏訪大明神を崇拜し度々戦勝祈願をするなど諏訪大社との関係も深い。『甲陽軍鑑』によると、信玄は、「三年の間我死たるを隠して國をしづめ候へ……」「……それがしとぶらひは無用にして諏訪の海へ具足をきせて今より三年目の亥の4月12日に沈め候へ……」(諏訪の海：諏訪湖/具足：甲冑)と遺言したという⁵⁴)。(a)ただ、この伝承(『甲陽軍鑑』)をもって「軍書談」とする確証はなく、むしろ、「御射山」に少しも繋がらない点で違和感がある。(b)そうではなく、御射山御狩の5日目(30日⇨正しくは29日)を載せたくて「30…諏訪社…」と書いたのだとすれば違和感もなく、「御射山」の作句のことも合点がいく。ただ、肝心の「軍書談」とは何かという疑問が残る(狩?流鏑馬等の武芸?⇨上述(ア))。これ以上見当つかない。(c)そうでもなく(諏訪大社も御射山御狩も関係なく)、文化12年7月29日に上町(長沼)に入り、その翌日(30日)、当地の諏訪社で「軍書談」があったという類の話か。文化14年2月の日記に「8…志道軒軍談」「9…軍談」「21…軍談」「22…軍談」「23が…軍談終」(当月は馬橋⇨守谷⇨布川⇨太田と移動)というような記述があり、また、長沼周辺に諏訪社や諏訪神社が昔からあること等からするとあり得ない話ではないが⁵⁵、唐突過ぎて釈然としない(志道軒とは、「江戸中期の講釈師深井栄山。…浅草寺境内で軍談をはじめ、江戸の名物」となり、一茶は「その流れをひく講釈師の軍談を聞いた」⁵⁶とされる)。愈々紙幅も尽きてきた。更なる考察は他日を期したい。

おわりに——結びに代えて

一茶の相続争いに関する考察を契機に、「焚くほどは……」の作句場所や作句日の絞り込・特定(本編)、『七番日記』にみる“はつ雪”の謎解き(補遺編=本考察)と続き、その弾みで“お竹大日如来”“諏訪社・御射山”にも踏み込んだが、新たな謎が増えてしまった(門外漢故の心得違いがあったかも知れないが、その辺はご海容頂きたい)。

2022年(令和4年)7月2日、長野県信濃町一茶記念館にて「一茶と相続-その真実に迫る-」と題する講演をした(一茶記念館講座)。拙稿「諏訪の末子相続と北信濃の均分相続」が同記念館の目に留まったとの由。COVID 19により3年延期しての実施だった(当日の講演内容が7月19日付「毎日新聞」東京夕刊コラム「憂楽帳」に掲載されるなど(「一茶の『落差』」田倉直彦)、印象深い講演会となった)。それから約2か月後の9月17日、放送大学(長野学習センター)にて「信玄公旗掛松事件“の背景を探る《第2弾：完結編》-「権利の濫用は、これを許さない」の誕生秘話-〔中央本線建設と諏訪郡の製

⁵⁴ 高坂弾正著(他)『甲陽軍鑑』(明治25・26年・温故堂)〔品第廿九目録・卷第十二〕81頁～82頁。

⁵⁵ 文化11年7月にも「26陰 小雨 夜丑刻大雨 鴈田村諏方社ノ花火一覽 花火持 二人焼傷スト云」(下線は筆者)とあり(鴈田村:現小布施町雁田)、その下段後方に「世につれて花火の玉も大きいぞ」「一しめり花火のきげんよかりけり」「大それた花火の音も祭哉」が並ぶ(丸山・前掲『七番日記(下)』67頁)。小布施岩松院の約300m南西にある雁田水穂神社(「大それた……」の句碑がある)から約1.8km南西(現北斎館の南)の所にかつて諏訪社と称された逢瀬神社がある。「明治22年5月21日小布施諏訪宮又は諏訪社と称せしも逢瀬神社と改称」とのこと(長野県神社庁HP⇨神社紹介>上高井支部>逢瀬神社)。雁田水穂神社境内から諏訪社の花火を眺めたのであろうか。

⁵⁶ 丸山・前掲『七番日記(下)』305頁及び注②。

糸業/塩尻から岡谷まで西条炭を運んだケーブルの謎』と題する講演をしたが（公開講演会）、こちらも2年延期後の実施だった（『専修総合科学研究』24号・25号・28号所収の論考を纏めたもので、これも思い出深い講演会となった）。

昨日まで知らなかったことを今日知るのには実に愉快である。融通無碍な思索が時間を忘れさせてしまう。そのうち、日本橋久松町・笠森稲荷跡・日暮里本行寺の界限をのんびり散策してみたいものである。

◀ “枯れてから思えへば皆んな欲目也” 一茶『七番日記』（文化15年（文政元年）6月） ▶

令和5年6月2日 摺筆